

考えている（『共同体の表現へ向けて』、『コトブレ』昭57・4
東京学芸大学国語教育科）。おそらく『共同体』のニュアンス
がちがうわけだ。吉橋氏と、おくれたきた私とのやはり（方法）

のちがいである。

(3) 兵藤「物語・語り物と本文」『国語と国文学』昭55・9
（ひょうどう・ひろみ／東京大学大学院）

『国民文学論』の初心

——猪野謙二『近代日本文学史研究』をめぐって——

高橋 新太郎

戦後の国民文学論の文脈の中で、猪野謙二の『近代日本文学史研究』（一九五四・一、未來社刊）を位置づけ、批判・検討せよというのが、小稿への課題であるが、すでに猪野の戦後の仕事については、一九六四年十一月の日文協関西大会での報告に基づいた奥村久美子の『戦後の日本近代文学研究——猪野謙二氏の場合』（『日本文学』一九六五・三）や、深江浩の『国民文学論をどう考えるか——思想的側面から』（同、一九六五・四）『国民文学論におけるリアリズム概念の行方——猪野謙二氏の漱石研究をめぐって』（同、一九六五・一二）、関口安義の『猪野謙二『増補・近代日本文学史研究』批判』（同、一九六六・三）、さらには、西垣勲の『猪野謙二論——その戦後の出発』（同、一九七八・一〇）の載った同じ号には、『文学研究における戦後の出発』と題された座談会での、猪野自身による、かなり立ち入った跡づけもある。それらの論考を参照し、かつなるべく重複を避けて、猪野とその著をめぐっての私なりの現象的

感想を綴ることで責をふさぎたい。

終戦後一年、戦後の文学は究極的に待望されるべき新しい創作的実践が未だ緒に就かぬうちに、すでに大きな変貌を示している。すなわち、余りにも安易にして素朴な政治への歩み寄りといふ過渡期の症状がなお継続している反面に、すでに時をえ顔な文学の独自性回復の名に於ける、政治的なるものの拒否の気運が昂まりつつある。そして前者がその事もなげな自己放棄による民主主義的紛争の無内容を暴露しつつあるに對して、後者はその宿命的な政治への反撥を通じて、民主主義革命に進行する反革命的乃至は傍観者の傾向となって現れている。しかもそれは政治の拒否によって、かえって現在に於ける最も反動的な政治との野合とならざるを得ないのであるが、さらに戦争責任の曖昧化、極端な犯罪者の文学者の退場あるいは変装等とともに、前者もまたいつしか後者への転化を見せつつある点こそ、今日充分に注目されねばなら

ない。

猪野の最初の著『近代文学の指標』(一九四八・一一、丹波書林)に収められた「政治と文学——二葉亭に就て」(『文明』一九四六・九)の冒頭の一節である。猪野はこれに続けて、文学者のその転身や成長に当って避け得ぬはずの、「内面の苦痛と懷疑」を知らぬ安易さを批判し、「問題を文学それ自体の道」においてではなく、「一種の諦念と自棄とを交えた時の政治への無抵抗な屈伏追従」によって解決して来た哀しき「習性」の残存を指摘して、「はげしい自己批判と懐疑」を経験した最初の文学者としての二葉亭の苦闘を跡づけている。ここに看取される、アクチェアルな戦後の切実なモチーフに支えられて対象に立ち向う姿勢は、猪野の論業を特徴づけるもので、「さし迫った現代における私たちの生きかた、そこから生れる文学の問題と結びつかない文学史研究などを、私は自分の仕事として考えることはとうていできなかった」(『近代日本文学史研究』あとがき)という言葉と結び合う。『近代文学の指標』には、荒正人の世代論への批判や戦後の藤村論を領導した平野謙の「新生論」への反指を含む論考も収められており、『近代文学』同人への「共感」と「反感」の微妙に錯雑する境位に自己定立が計られている。『近代日本文学史研究』は三編編成で、『近代日本文学の展開』と題された第一部は、明治文学の展開がたどられ、猪野の「基本的な問題点と考え方の筋みち」が示されている。最も早く書かれたのが日本評論社版『日本文学』第一輯(昭24・7)に発表された『日本近代文学の主体——透谷から藤村へ』(原題「透谷から藤村へ——文学史的素描」)で、透谷の政治から文学への転換に敗北から出発した安易さを読む福田復存論を俗論として斥け、脱俗でも精神

主義でもない、国民的詩人のとるべき悲痛な宿命をたどったのだとして、透谷の内面の矛盾と苦悶に身を寄せつつ、藤村文学成立の筋道に委曲を尽したもので、猪野の藤村把握の中核をなす論である。

なお、この『日本文学』第一輯に狭み込まれた日文協の「会員ニ・ノス10」には、猪野の「近代主義からの脱却」と題された、近代文学研究の小展望がある。そこで猪野は、明治以後の文学史をもつばら自我の成長発展の過程としてとらえる「自我史的な方法」に対する批判が行われたことに触れつつ、今後の近代文学研究の範囲が、明治以前の封建社会の文学との関係において把握する方向に進むべきことと、従来、意外にも手薄であった「文献学的研究」の領域に拡張されねばならぬことを説き、それらが歴史家への「依存」ではなく、歴史家との協力による共同研究が要望されている。ここには、文学史家としての猪野の、後年の国民文学論に及ぶ必然の筋道とその姿勢を明視することができる。「伝統と現代」と題された第二部には「明治文学と平和への意志——非戦文学貫之書」(初出題「平和文学論のための覚之書」、『文学』昭24・7)、「私小説と民主主義文学」(『人民文学』昭28・8)や国民文学論議の渦中でありかわされた「歌舞伎について」(初出題「桑原武夫氏の批判にこたえる」、『文学』昭27・5)や、未発表の「ふたたび桑原氏に答える」を収める。かつて荒正人が「文学史とは何か——学問としての批評」(『大阪新聞』昭29・2・23)の中で猪野の著を「研究的なもの」と批評的のものが、均等を保って存在している」と評したが、これらの論は、猪野の関心とその幅の広さを示すもので直接間接に国民文学論の論点と関わるものである。桑原との歌舞伎論争は、一九五二年度の日文協の総会のテーマ「日本文学の伝統と創造」の一

環としてとりあげられ広末保による報告もあった。

国民文学論の提唱者竹内好が、「国民文学の問題点」(『改造』昭27・8)の中で自らの意見に代えて、ほぼ同意見のものとして紹介したのが猪野の「日本文学研究の現状と問題——その態度と方法の問題を中心に」(『文学』昭26・12)の結尾の部分、外国文学を専攻する学者・評論家による日本文学研究について批判したところである。猪野の立場からの戦後の日本文学研究の総決算といった趣きの文章で、いわば国民文学論の立場から総括したものであった。本多秋五も『物語戦後文学史完結編』(昭40・6、新潮社)で「内容の包括的なことと、態度の積極的なことと、彼の書いたものうちでもっとも勝れたもの一つ」として引用している。猪野は、桑原武夫の『第二云術論』や中村光夫の『風俗小説論』、『二葉亭四迷論』を念頭におきつつ、「このひとたちによってせまかき意図されている伝統的な文学概念や文学形式に対する批判、日本近代文学のゆがみやかたよりの是正が、あくまでもヨーロッパ近代文学の古典的な形式、ひいては抽象化された純粋な理想的形式を範型としてこころみられ、近代日本の民衆生活における現実、あるいはその矛盾がまったく器械的に、さいしよから切り捨てられてしまっている点」を衝き、その明治以来の「上から」の近代化の錯誤の尾が、「はつきり」と意識的に民衆の中に立っている、いわば民主主義派の評論家や学者たち」にも及んでいるとした。

この論(『日本文学研究の方法と課題』と改題)をはじめ『近代日本文学への眼——国民文学論ノート』(『日本読書新聞』昭27・12・8)や「中野重治氏『国外』その側面」(『日本読書新聞』昭27・8・13)その他の書評をもって編んだのが「方法と課題」と題された第

III部である。中野の『国外論』にふれた文には、「矛盾をあくまで矛盾のままに反映しつつ、その矛盾のままに反映しつつ、その矛盾の激化、したがって彼自身の人間的な危機の深刻化こそかかえて文学としての豊かさをもち、その矛盾の回避ないしはそれへの居坐りが作品としての貧しさを結果しているような、そういう一個の全体的な有機体としての作品そのものの文学的な解明と評価とを具体的にすすめてゆくこと、そのことこそが、こんにち『国外』の中に潜むさまざまな可能性を掘り出してゆくための、ともやり甲斐のある仕事の仕方ではないか」といった根柢の言も見られる。私見によれば文学史家猪野謙二を理解するキーワードは、ここに説かれているような意味での「矛盾」であり、「可能性」にはかならない。それは、漱石・二葉亭・透谷・独歩・啄木への論述を中核とした猪野の著『明治の作家』にも通底している。国民主義と近代主義、国士的使命感と市民意識、経世と風流、加害者と被害者、覚醒と幻滅、といった対立・拮抗・重層するものへの身の寄せ方、日の暁らし方、可能性の芽をすくいとろうとする誠実な粘り強さにこそ猪野の文学史研究の本領がある。

ところで、本多秋五は、前記の国民文学論の概括の中で、現在「国民文学論は忘却の淵に投げ捨てられている」(『物語戦後文学史完結編』昭40・6)と書いている。かつて三好行雄は、「戦後——その一面的かつ図式的な展望」(『日本文学協会会報』『日本文学講座』日本文学研究法』昭30・2、東京大学出版会)の末尾で、日文協を中心とした「伝統と創造」の提言の中で「研究者の主体喪失の危険」について控え目に指摘しつつ、最後にこう結んでいる。「二九年度の大会において、永平和雄氏は『国民文学論の課題』について

報告し、きわめて精細な整理、展望をはたしながら、その抽象性を指摘され、また三好行雄は『藤村の詩について』報告し、仙台の孤絶性を中心にして『若菜集』の成立を論じたが、『国民文学創造』に対するあいまいさと『実証性』という観念性』を批判された。実証的だったというならば、それは過褒だ。しかし、かりにその批判者がいうように、近代文学研究の目下の状況が、抽象的な論理と、そのような観念性がべつべつの方向をむいているとするならば、その事実、国民文学論の、いやもっと正確にいえば、国民文学論に立脚する文学史研究の限界が生れはじめているのではないか。自壊作用といってしまえば、むろんいいすぎであるが、「三十年近くも経た、あの六月十三日の国立博物館大講堂での日交協の大会を思い出しながら記すと、総テーマは『国民文学の課題』で、古代が『東歌』中・近世が『西鶴』、近代『藤村詩集』現代『国民文学の問題』についての報告、討論があった。一学生として（当時誰もが苦学生であつたような気がするが）、日交協の大会を体験したわけであるが、初体験でもあり現在に至るまでの唯一の体験でもあるあの大会のこまかいやりとりはすでに忘却の彼方にあるわけだが、あの時代の、あの大会の熱した雰囲気とか、かぶりだけは今に甦らすことができ。当時活躍しただれそれを目して、『日交協親衛隊の若手三羽鳥』といった野次馬的風聞も耳にした時代であつた。猪野謙二は、その大会に向けての六月号の機関誌に『組織について』の感想』を寄せている。日交協組織部の文章に対する所感である。「へ綱領』でお互に確認されていること以外に『協会の学問』などあるはずはない、あつてはならない。そんなものは文字通り『ひとりよがり』の学問にすぎない。実際は個人個人の生命をうちこんだ学問があり、

の文学史研究の営為は、一貫して国民文学論的見地に立つものである。竹内好もしばしばもらしていたように、国民文学運動には「文学史の再評価がどうしても必要」なのである。国民文学論は、危機的状況の認識に発想されたものではあるが、本来、時代の要請をも超えた課題、いわば百年の計であつたはずだと思ふ。国民文学論の論議も整理されぬままに、丸山眞男流にいえば「生き埋め」になつたままである。国民文学論の正負の勝分けは、声高な宣揚によってではなく、思いを沈める志の持続によってこそ達し得られる。前田愛の『国民文学論の行方』、『思想の科学』昭53・5臨時増刊は国民文学論が胎んだ論点を要領よく概括したものであるが、そこには『日本近代文学大事典』での伊豆利彦の敘述への批判もあつた。いろいろな意味で未決なのである。猪野謙二の『近代日本文学史研究』一卷は、猪野の戦後の出発と国民文学論の見地を色濃く刻んだ紙碑としてわれわれの前に在る。そこにはいわば国民文学論の初心が思つ

それらが共通の目標を自覚することによって、たがいに対立しつつしかも有機的に結びついてゆくところに、日本国民全体の学問が生み出されようとしている、ということが出来るだけだ。だから『会員一人一人の主体性が協会のうちだしていく方向にながりをもちようにならなくてはならなかった』などということがあつたとすれば、それはまちがいであつたと思う。『方向をうちだす』のは『会員一人一人の主体性』であつて、協会ではない。……そうはいつても、現在のわたくしたちの学問がすぐれて党派的でなければならぬことはいまでもない。その党派的ということとは協会的などということではない。それは、たとえば『新教育の授業過程』に追われていく『学生』とわたしたちすべてとの間にはけつして『開き』などはないという、あきらかな事実の上に立って『未来に対する平和の可能性』、文学学問の可能性を自己の主体とのつながりにおいて『積極的につかもうとするところ、そのような学問の実践性を確認しようとするところから生れるものだ。つまり、現在のところではいかなる圧力に対してもけつして、国民としての根本的な考え方や立場は譲らなない、ということがわたくしたちの学問の党派性ということであると思う。』一枚岩的なより、かかりを排して、一人の主体性をいう猪野の発言にみられる態度は、今に変わらない。猪野があえて発言しなければならぬような、あるいは、三好が書いたような上すべりなたかぶりを日交協が抱えていたことも確認しておいてよいことだと思ふ。猪野は『竹内好全集』の月報にも『国民文学論のころ』(昭55・10)を書いているが、国民文学論が退潮し、その不毛がいわれ、多くが置き去りにしていた時期にも低声ではあるが、その未決なることを折りに触れて言い続けてきた。近著『明治文学史』に至る猪野

いている。平野謙はこの著を「処女地を耕すブライオ」と評しつつ、また「途中の論」(『図書新聞』昭29・3・20)であるとした。猪野自身、このことをよく引きもしているが、猪野は、竹内に似て、体系だった物言いよりはむしろ、その論述の「臍の緒のつながり」において、より強く読者をひきつける。猪野が「途中」を自任するかぎり、猪野の文学史研究の営為は、あの、「だが、にもかかわらず」といった、留保と批判の重層する措着の文体によって今後も書き続けられてゆくはずである。そして「上外への方向よりもむしろ下降への方向において考えたい」(『明治の作家』序にかえて)といったような、あるいは、八丈島共和国を発想した解体期新選組の浪士(『日本文学の遠征II』)的風貌を深めた猪野の、地熱の高さを思わせる低音部においてこそその木領を發揮する、あの独特の語り口に、私自身の強い期待と親和がある。

(たかはし・しんたろう／学潤院女子短大)